

平成13年度(2001年度)大学図書館職員長期研修を終えて

法学部整理掛 早川 順子

“図書館は成長する有機体である。”これはインドの図書館学者ランガナタンが1931年に発表した「The Five Laws of Library Science」の第5法則です。大変著名なこの法則は、70年を経ているにも関わらず、今日少しも色あせていません。私は、大学図書館での仕事に従事して以来、特にこの第5法則をよく意識しています。今日での、電子ジャーナルの趨勢やILLの発展の例もこの法則に当てはまると考えています。資料も利用者也、そして資料と利用者の媒介者である職員も皆、図書館の構成一部分であり、成長していくものではないでしょうか。

このように常に変革していく図書館情勢に耐え、かつ推進していく職員の資質の向上を目指して、標記の研修が昭和44年度より、例年、主に国立大学の図書館職員を対象に行われてきました。幸運にも、今年私も33名のうちの一人として、参加させていただきました。

講義の多くは時勢の電子ジャーナルに関連するものでしたが、他大学の事例が存分に伺えました。また、今回は研修場所が東京大学・筑波大学・図書館情報大学・国立情報学研究所、見学先が凸版印刷の印刷博物館・国文学研究資料館・東京工業大学・国会図書館と、多くの施設を拝見できたのが収穫でした。



図書館情報大学情報メディアユニオン

特に新しい機器の備わった施設には、目を見張りました。中でも、図書館情報大学内の今春開館された情報メディアユニオン（愛称ユリス＜ULIS＞）のICチップゲートと、印刷博物館のヴァーチャル・ミュージアムについては、コンピュータのもたらす未来についてわくわくとした期待を抱かせます。



ICチップゲートの説明

※図書を携行してゲートを潜るだけで、貸出記録を執ることも可能。

そして、3週間の研修で多くの知己を得ました。図書館という場は、お互いの技術を教えあって高めあえる、貴重な社会です。企業のように技術を独占することで顧客を確保するという仕組みではありません。今後ユニークな情報を同じ方法で利用できたら、利用者にとってどんなに便利でしょうか。

オリジナルな資料を多く持ち、多数の知見ある図書館職員を抱える京都大学でも、調整された分散主義を維持するというのなら、それぞれの図書館のネットワークをより進化させていく方向へも向いて欲しいと思います。

私は、鮭が産卵の為に生まれた川を遡るように、いつかこの研修に参加し、我が母校図書館情報大学で再び講義を受けることが励みでした。参加が実現いたしましたのも、法学部でのご協力を始め、皆様のお力添えあってこそ、この場をお借りしまして、末筆ながら御礼申し上げます。

（はやかわ よりこ）